

魔にくすぐられて

三木 卓

魔にくすぐられて

三木 卓

魔にくすぐられて

昭和五十四年九月十日第一刷発行

著 者 三木 卓

発行者 関根栄郷

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八
電話（編集）二九四一六七二一

（営業）二九一七六五一

郵便番号 一〇一 一九一

郵便振替 東京 六一四 一二三

印刷 三松堂 製本 積信堂

装 幀 野田哲也

©三木卓 昭和五十四年 Printed in Japan

〇〇九三一八〇一八八一四六〇四

魔にくすぐられて

目次

犬と争う

5

魔にくすぐられて

25

兆の日々

49

傷

69

治療の夕方

87

荻

107

絵

129

熱

151

蛾

171

転居

191

あながき

212

犬と争う

六カ月前から、妙な部屋を借りている。その部屋に辿りつくためには、郊外電車の駅を下車してから放射状にひろがる一八〇度以内の、どの道を歩き出してもいいのだ。

馬鹿げている！ 道が駅を中心にして放射状になっているなら、絶対にそうはならぬはずである。わたしもそれを認める。だが、わたしの部屋に関する限り、実際に駅前に立ってみると（線路のもう一方の側はともかくとしても）どの道を行ってもいいような気がするのだから仕方がない。事実、ちょっとした買物の都合で、その日のコースは殆ど自由な気持で決まってしまう。殆ど、といったのは、わずかながら遠近の感覚がないではないからだ。とはいえ現実にあるだろう距離差に比べれば、なんと僅かなことか。そして、わたしの頭のなかに描かれている道路図は、実際のものに比べれば、相当に奇怪なものの筈である。わたしの感覚を押していけば道は大きく彎曲していなければならない。平面ではなく巨大な一個のネーブル。その一点からむこう側の対称の一点にむかって任意のコースをたどっている、とする。これなら納得できる。しかしこれは、現実の町なのだ。そんなことはあるはずがない。

そのことを理性で自分にいいきかせている。が、まだ納得できていない。納得できない方が楽しいせいかもしれない。わたしは、都市の住宅地帯をつらぬき流れる川のほとりにある小さな冷

え切った部屋を愛しているので、この部屋が、いっふう変った特徴を持っていると思うことが好きらしいのだ。

もうひとつ妙なことがある。ひどくわたしを苦しめていることなのだが、夜遅く部屋に帰ろうとすると必ず犬に吠えつかれるのである。

理由は簡単である。わたしの左下肢が幼い頃罹った病気で麻痺していて、そのために右下肢より短くて瘠せているせいなのだ。わたしは歩くたびに身体を波打たせなければならず、犬はその異様な者を見のがすことはできない。かれらは片足をひきずってよろめきながら進む男を咎め立てて誰何^{すいか}する。誰何された男はそこを通りすぎる。かれは次の夜は別のコースをとる。しかし蒼い月に照し出されていっそう蒼白になったかれは、ふたたび、影を直下に落しながら立ち止まる。前方の鉄柵と植込みの繁みの彼方で蹲まるようにかまえている黒い獣の影を見たのだ。次の瞬間、獣は鉛が沸騰する時のような怒りの叫び声をあげ、かれを恐れさせる。その翌晩、かれはまた別のコースをとるが、また同じことが起るだけだ。

わたしの頭脳のなかの地図には、だから静脈の青で塗られた道に犬が一匹ずつ、必ず書きこまれている。シェパードもいれば柴犬もいる。グレート・デンもいれば、チワワもいる。狛もいる。グレート・デンなどまだ一度も出会ったこともないのに、空想の世界のなかではちゃんと吠えかかる態度でわたしを待っているのである。

部屋を借りて一週間目の夜のことだった。酔いが深く、わたしは真紅に充血した内臓を抱えこみながら前かがみになって部屋へむかって歩いてた。冷えた大気は酔っているために藁灰を作るような匂いがした。信頼していた人が約束を守ってくれなかったことが判ったので落胆していた。約束を守らなかったのが、わたしの存在をないがしろに考えていたせいだ、と判ってしまったからだ。もちろんそんなことはよくあるはなしで、どうでもいい、一晚ねむればすっかり忘れてしまうはずだと思っていた。そのくらいには大人になっていると思っていた。ところがどうだ。深酒をしていた。酒場の女がおとなしいのいいことにして無理やり下着に手を入れて身体にさわったりした。

門があった。門には小さな鉄扉がついていて門がさしてあった。門までは二段の階段があった。門の内側には木があった。扉は低かった。わたしは通りすぎようとした。すると犬が吠えた。

反射的に立ちどまった。門の内側は暗かった。屋敷には灯りがともっていたが、その光がぎらぎらしていたので、かえって外の窪みや木蔭の下方に深い闇が淀んでいた。嫌な気分が湧きあがってくるのをこらえながら闇のなかを覗きこんだ。酔った眼には何も見えなかった。

犬が吠えた。びくっと身をひくほど意外に近かった。身構えながら再び闇のなかに目をこらした。犬の形は見えてこなかった。犬は吠えつづけた。声の質からして大きな犬ではない。見当はついた。立去ろうとしかけたが、その晩のわたしはそうしてはならないような気がしていた。立ったまま門の中の闇を見つめていた。庭には金木犀の木があって甘い匂いが闇に漂っていた。土

の上にはだいたい色の肉の厚い花卉が細かく散り敷いているにちがいがなかった。

犬は吠え続けた。わたしは自分が立止っていることに快感を感じていた。月は出ていなかったし、街灯はすでにわたしの背になっていたから、わたしはかれの眼から見れば黒い影法師になっているはずだった。かれは、片足をひきずって波打つリズムであるいているわたしの姿に異常を感じ、世界にむかって警告を発したのだ。都市のなかで人間はわたしのような歩きかたをするものではない。犬は人間に危険を感じない。そのことをおもしろく思った。

吠え声に耳を傾けた。犬は苛立っていた。犬はわたしを排除することにやっきになっていた。黒い、ぐらぐら揺れる未知の影法師はそこにいて動かない。わたしは犬の吠え声がまっすぐわたしに向けられているのを感じ、それをうけとめていた。こんなふうに正面から面罵されたことは人間の世界ではずいぶん長いことなかった。しかし、面罵されなかったのはそうされる理由がなかった、という証明には少しもならない。それどころか、わたしは面罵される理由がなからうとあろうと面罵されてしかるべきなのだ。今までそうなっていないかったのは、いやらしいことだった。

犬がそれをしてきているのだ、と思った。犬は隠さずに正直にやる。犬はわたしを不快に思っている。吠えられて立ちつづける。わたしはその立場を手放したくない、と思った。

玄関には洋風のドアがついていた。ドアにはランプのダイヤの型に切りぬいた窓があつて、花硝子が嵌められていた。ドアは門灯の光の中に薄暗くあつた。

不意にダイヤ型の花硝子が輝いた。輝くのと同時に曲線の境界を持つ影が斜めに硝子面におちた。

その瞬間犬の声が低い咽喉を鳴す音に変わった。警告のかん高い吠え声は消え、威嚇の声になった。わたしは犬が少し近づいてきたのを感じた。わたしは身体をひいて身構えたが、その瞬間、頭蓋の暗い奥の方でノズルの先がひらき熱い液が内壁にむかつてはとぼしるのが感じられた。ダイヤ型の花硝子が輝いたのは、暗い玄関と人の住んでいる場所のあいだを仕切っているのは、玄関までやって、光がさしこんだからなのだ。曲線の境界を持つ影が硝子面におちているのは、玄関までやってきた者が扉の前にそっと立って外をうかがっていることを意味する。犬は耳敏くその気配を感じとり、勇氣を得たのだ。

攻撃してこないとも限らない。わたしは注意深く闇のなかを探索した。犬の変化がわたしの怒りと呼んでいた。すると闇のなかに燃えるだいたい色の二つの目が見えた。それだけわたしに接近しているのだった。さっと身を屈め、右手をコンクリートの上にふれた。光る目はふっと消えた。いっそうけたたましくなった吠え声ははるか離れたところから聞えはじめた。そのまま右手でコンクリートの三和土をさぐりまわると、すべすべした小石に出会った。拾い、植込みのなかに力いっぱい投げこんだ。葉をつらぬき破っていくするどい音が走り、雨戸にあたってはねかえる重い音がした。犬は一瞬沈黙したが、次の瞬間には気が狂ったように庭の奥を跳ねまわり、火のついたねずみ花火のように叫びつづけた。

しかし、ダイヤ型の窓に映る人影は、全く動かなかった。投石したわたしを咎める声もなかった。わたしは暫く待っていた。しかし、犬だけが、すべての災厄が自らの上におちかかっていたかのように騒ぎまわっているだけだった。わたしはその犬の状態で満足していたが、窓の人影を無視することはできなかった。金木犀の甘い匂いが漂っていた。へひょっとして、あれは人影ではないのではあるまいか？ わたしは思った。へ帽子かけの帽子の影とか、そんなものではあるまいか？

秋の冷たい大気がわたしの酔いを一枚ずつ剥ぎとっていき、立っているのが辛くなってきた。こうしていてもどうなるものではない。唾をひとつ吐き、歩き出した。犬は力を得たように声をはりあげて吠えはじめた。十数メートル離れたところでふりかえってみた。ダイヤ型の窓は真暗になっていた。

その夜からのことだった。犬に吠えつかれて、それをのがれて逃げることでできない夜が、幾晩か毎にめぐってくるようになった。どういうことなのか、不審に思っただけで観察をつづけた。犬の態度のちがいは関係がなかった。問題はわたしの方にあった。わたしは自分の胸が九十度の角度に犬の声をうけとめるように立って動かなくなってしまう。さらに犬にむかって接近して行きたくなる衝動を押えているのだった。

犬に対して攻撃をしようというのではなかった。最初の晩は小石を投げたが、以後はしなかつ

た。だからといって平静だったか、といえどもちろんそうはいかなかった。足が悪いということ
を人に知られるのは致しかたのないことだ、と思っていたが、犬に咎められるのは苦痛だった。
しかし、同時に喜びであることもまたしかなかった。そのことは負けおしみでなく、はつきりと
いえる。犬はわたしを総体として知っているとはいえないが、わたしのありのままをたとえ断片
であろうと知っていて語っているのだ。わたしが近づいていきたい、という衝動をおぼえるのは、
犬にさらによくわたしを見てもらいたいためであり、さらに犬の声をあびることで自分を知りた
いからなのだ。

たとえば月のない、暖気のむつと来るような夜であったり、わたしが深い酔いのなかをさまよ
いあるいているような時であった。酔いが深ければ深いほど、わたしは犬と向きあおうとする。
関係が深くなる。犬の吠え声も鋭く大きい。わたしがその時見るのは門であり塀であり、鑑戸で
あり、這いまわる蔦葛である。犬はガスレンジで出来る料理の匂いやカーペットの模様とともに
あって、その最外輪にいる。だが、犬が首をめぐらせているのはその中心へむかってだ。突然ふ
りむいてかれはわたしを見る。わたしはかれの圏外にたたずんでいる。犬はわたしの背後に、何
時の日か忘れてしまったが、かれがかつて出て来た暗い森を見るのだ。誤解のないようにいつて
おこう。足が悪いことなど、単なる糸口にすぎない。そして犬がふりむいた時、われわれの関係
は、はじまるのである。そしてダイヤ型の窓の輝きが背後にあるのだ。

いつもそうだったと思う。わたしは犬を飼って育てたこともあるし、争いの関係にあったこと

もある。ところが人は、わたしと犬の關係に立ちいるのを好まない。わたしと犬がいれば、気づいたかれらは姿を現わすまいとする。

これも晩秋の日のことだが、われわれが睨み合っていると庭に面した窓の木製の鎧戸が左右に開いて、髪の毛の一本もないさっぱりしすぎた男が顔を出して「おい、貴様、何をしているんだ」と怒鳴った。わたしは仕方がないので「犬を見てるんだ」といった。

鎧戸が閉まり、今度は玄關の扉があき、木の棒を持った件の男とその息子らしい学生が出てきた。わたしの顔を見ると「一步でもはいつてみる。家宅侵入罪だぞ」といった。わたしは両手の上にあげて、「ここは公道だろ」といった。「公道なら立っていようとねころぼうとおたくらの関知するところじゃない。おたくらの家になんか一ミリメートルも入っているものか」といった。

男たちは一寸のあいだ、黙っていたが、やがて「じゃ、なぜ立っている」と訊いた。「おたくらの犬がおれを呼びとめるからね」わたしはいった。「おもしろい犬だから、見ているんだ。それだけだよ。おれは何にもしていないぜ」男たちは黙っていた。あきらかにどうしたらいいのかわからないのだった。「じゃ、なぜ、うちのが吠えるんだ。おかしいじゃないか」かれらは不審気な氣持を隠そうとはせずに行った。今度はわたしが困る番だった。吠えられる理由を教えてやるのは業腹だった。「公道をあるいている人間がだ」わたしはいった。「私有地にいる犬に吠えられたからって、その理由を飼主に説明することはない。そうだろう」相手は疑わしそうな目でわたしを見た。「いいかね。おれは公道にいるんだぜ。おたくの敷地に踏みこんだから犬が吠えた